

局 施 策 評 価 票

平成 **21** 年度実施施策

A時点: -	B時点: -	C時点: 22. 7月

局名	企画文化局
-----------	--------------

基本計画	柱	暮らしを彩る
	大項目	生活に根づき_誇れる文化・スポーツの振興
	取組みの方針	芸術・文化の振興

担当局 / 総務担当課名	企画文化局	企画課
連絡先	582 - 2153	

21年度計画

-2-(2)-

施策名	芸術・文化の担い手の育成
------------	---------------------

施策の概要	何(誰)をどのような状態にしたいのか。	子どもの豊かな心や感性・創造性を育むため、子どもたちが身近に伝統文化や芸術・文化にふれる機会を充実させるとともに、芸術文化活動を自ら行う人や、コーディネートする人、鑑賞者など、幅広い芸術・文化の担い手を育成します。
	その結果、実現を目指す取組みの方針名	芸術・文化の振興

成果指標 (上段:指標名、下段:指標設定の考え方)	現状値		計画	平成21年度		目標値	
	年度	H21年度		実績	人	年度	H25年度
芸術文化活性化事業の参加者数	年度	H21年度	計画	-	人	年度	H25年度
北九州芸術劇場・学芸事業及び響ホール事業・音楽アウトリーチ事業は次世代の芸術・文化の担い手の育成につながるものであり、またこれらの事業の参加者数・聴衆者数が演劇及び音楽にふれる機会の指標となるため設定しました。	現状値	4,242人	実績	4,242	人	目標値	4,200人
			達成度		%		
芸術文化体験事業への参加者数	年度	H21年度	計画	-	人	年度	H25年度
子どもたちを対象とした文化体験・鑑賞事業である「子ども文化ふれあいフェスタ」参加者数及び北九州市民文化賞・奨励賞受賞の音楽家を小学校等に派遣し、生演奏にふれる機会を提供する学校訪問コンサートの参加者数を指標としています。	現状値	3,388人	実績	3,388	人	目標値	2,500人
			達成度		%		
北九州市子どもノンフィクション文学賞への応募者数	年度	H21年度	計画	-		年度	H25年度
子どもたちが自身の体験を通して、ノンフィクション分野の文学にふれる機会となる「北九州市子どもノンフィクション文学賞」への応募者数を指標としています。	現状値	1,524件	実績	1,524	件	目標値	2,000件
			達成度		%		
コスト	A時点 - B時点 - C時点 22.7月 [21年度:執行額]		事業費	316,906	千円	構成事業にかかった人件費の目安(21年度)	
			うち一般財源	297,128	千円	20,640 千円	

局施策に対する担当局の評価

局施策の評価	21年度評価	主な分析理由
成果指標の結果を踏まえ、構成事業の評価結果なども考慮し評価を行う。	A	演劇分野においては「北九州芸術劇場・学芸事業」でアウトリーチ活動や専門家養成講座の実施、音楽分野においては「響ホール事業・音楽アウトリーチ事業」や「芸術文化体験事業」等によって、身近な場所で専門家による生演奏を聴く機会の提供、現代美術の分野ではCCA北九州が子供向けに、サウンドとムービーのワークショップを開催するなど、子どもたちを中心に様々な芸術・文化にふれる機会を提供するとともに、将来の担い手の育成についても寄与できました。 また、文学では全国的にも珍しいノンフィクション分野の子ども向け文学賞を創設し、第1回目にもかかわらず1500件以上の応募があり認知度の高さが窺えます。
今後の局施策の方向性	今後も同様の事業の実施を通じて、子どもたちに質の高い芸術・文化にふれる機会を提供するとともに、将来の担い手の育成に資するような事業のあり方について、効果を検証しながら取り組みを進める必要があります。	

【局施策評価】 A:大変良い状況にある B:概ね良い状況にある C:概ね良い状況とまでは言えない D:不十分な状況にある

評価担当部署の意見

適切な評価
 下記のとおり

目標値の考え方を示すことが必要と考えます。

施策名 芸術・文化の担い手の育成

構成事業名	事業費			事業にかかった 人件費の目安 (21年度)	経費分類 裁量的経費 義務的経費 特別経費(重点) 特別経費(臨時)	今後の方向性			
	C時点[21年度:執行額]					21年度			21年度
芸術文化活性化事業(劇場・学芸事業、響ホール事業)			141,743 千円	3,660 千円	裁量的経費・義務的経費			ウ	
事業費のうち一般財源			141,310 千円						
北九州市芸術文化振興財団委託事業			95,097 千円	1,320 千円	義務的経費			ア	
事業費のうち一般財源			80,752 千円						
芸術文化体験事業			7,794 千円	3,660 千円	裁量的経費			ア	
事業費のうち一般財源			7,794 千円						
現代美術センター・CCA北九州事業			59,190 千円	6,000 千円	裁量的経費			ウ	
事業費のうち一般財源			54,190 千円						
北九州市子どもノンフィクション文学賞			13,082 千円	6,000 千円	重点経費			ア	
事業費のうち一般財源			13,082 千円						
事業費のうち一般財源									
事業費のうち一般財源									
事業費のうち一般財源									
事業費のうち一般財源									

局施策全体のコスト	21年度	
	事業費	人件費(目安)
局施策全体の事業費のうち一般財源	316,906 千円	20,640 千円
	297,128 千円	

局施策の 21年度評価	【局施策評価】 A: 大変良い状況にある B: 概ね良い状況にある C: 概ね良い状況とまでは言えない D: 不十分な状況にある
A	

【事業の今後の方向性】 ア:事業の見直しを図ることが可能 イ:休止・廃止を検討 ウ:現状のまま進めることが適当 エ:終了

事業評価票

平成21年度実施事業	新規	継続

A時点: -	B時点: -	C時点: 22.7月

担当局/課	企画文化局	文化振興課
連絡先	582-2391	

基本計画	柱	暮らしを彩る
	大項目	生活に根つき誇れる文化・スポーツの振興
	取組みの方針	芸術・文化の振興
	主要施策	芸術・文化の担い手の育成

関連計画	
事業期間	前者:平成15年度～、後者:平成18年度～
経費区分	裁量の経費・義務的経費

-2-(2)-

事業名	芸術文化活性化事業(劇場・学芸事業、響ホール事業)	
-----	---------------------------	--

事業の概要	何(誰)をどのような状態にしたいのか、	[劇場・学芸事業] 演劇を通して、地域の人々をつなぎ、共に育っていくこと等を目的としています。 [響ホール・音楽アウトリーチ事業] クラシック音楽の担い手(演奏者側・聴衆側)の育成などを図ることを目的としています。	
	その結果、実現を目指す施策名と成果	施策名	成果
		芸術・文化の担い手の育成	芸術文化活性化事業の参加者数

目的実現の為に実施する内容	実施工程	年度					計画変更理由
		平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	
実施状況	当初計画		学芸事業参加者数 1,600人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	学芸事業参加者数 1,650人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	学芸事業参加者数 1,650人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	学芸事業参加者数 1,700人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	
	現状	学芸事業参加者数 1,607人 アウトリーチ聴衆人数 2,635人	学芸事業参加者数 1,600人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	学芸事業参加者数 1,650人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	学芸事業参加者数 1,650人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	学芸事業参加者数 1,700人 アウトリーチ聴衆人数 2,500人	
実施状況	成果・活動指標 (上段:指標名、下段:指標設定の考え方)					平成21年度	目標
	北九州芸術劇場・学芸事業参加者数					計画	- 人 年度 平成25年度
	舞台芸術における地域文化の拠点として、地域のコミュニティや教育現場との連携を図り、地域の公立劇場として期待される役割を果たすため、アウトリーチ活動や専門家養成講座などを実施する学芸事業の参加者数を指標とします。					実績	1,607 人 内容 1,700人
	響ホール事業・音楽アウトリーチ事業の聴衆者人数					計画	- 人 年度 平成25年度
身近な環境で音楽を直接届ける活動(アウトリーチ)を通じて、将来的な観客の開拓や育成などクラシック音楽ファンの裾野拡大等を図るために、クラシックの演奏家を学校や市民センターに派遣するアウトリーチ事業の聴衆者数を指標とします。					実績	2,635 人 内容 2,500人	
コスト	A時点 - B時点 - C時点 22.7月(21年度:執行額)					事業費	141,743 千円
						うち一般財源	141,310 千円
単年度計画						事業にかかった人件費の目安(21年度) 3,660 千円	

【事業の実施結果・進捗状況の確認】

実施結果	21年度に実施した結果、当初計画(実施工程)に対する進捗状況はどうか。	【劇場・学芸事業】全体で175回、1,607人というワークショップ、講座等を通じて、演劇、ダンスを様々な形で体験し、現する機会を提供し、人材の育成を図るとともに、演劇ファン層の拡大を図ることができました。また「おやじカフェ」は新たな企画として、全国に紹介されました。 【アウトリーチ事業】34箇所で開催し、2,635人が、身近な場所で生の音楽に触れることができました。小学校担当者、市民センター来場者のアンケートでは、満足度割合がそれぞれ、100%、86%と、実施先から高い評価を得ており、クラシック音楽の裾野拡大に寄与したと判断できます。
------	-------------------------------------	---

【事業の再検証】

評価	有効性 この事業は施策の実現に対し、効果があったのか。	4	北九州劇場・学芸事業、アウトリーチ事業はともに、子どもたち等に身近に舞台芸術・音楽に触れる機会を提供した事業です。施策目標「芸術・文化の担い手の育成」に対する有効性は高いと考えられる。	
	経済性・効率性 同じ効果より低いコストで得られないか。または、同じコストでより高い効果を得られないか。	4: 高い 3: やや高い	3	北九州劇場・学芸事業、アウトリーチ事業はともに、市の外郭団体が行っており、経済的な運営を実施している。ただし、短期的に成果が見えづらいため、目的と効果を検証しながら、事業を実施する必要があります。
	適時性 今実施しなかった場合、施策実現に対する影響はどうか。	2: やや低い 1: 低い	3	北九州劇場・学芸事業、アウトリーチ事業はともに、身近に舞台芸術・音楽に触れる機会を提供し、上位施策の実現への高い成果が期待できます。担い手の育成は、継続的に事業を実施することが、大切であると考えています。
	市の関与の必要性 実施主体として市が適切なのか、市の関与をなくすことはできないのか。	4	4	本市において、本事業のように計画的、総合的に運営することが可能な民間団体は存在せず、市が関与することは適切であると考えられます。
今後の方向性	評価結果を検証した上で、今後の事業の方向性(いつから何をどうするのか)を決定する。	ウ	北九州劇場・学芸事業、アウトリーチ事業は、主に子どもたちを対象に、文化に身近に接してもらおうという事業であり、「芸術・文化の担い手の育成」を図っていく上で重要な事業であると考えています。今後も目的と効果を見極めながら、目標の達成に向けて着実な取り組みを進めていくことが適当だと考えます。	

事業評価票

平成21年度実施事業	新規	継続

A時点: -	B時点: -	C時点: 22.7月

担当局/課	企画文化局	文化振興課
連絡先	582-2391	

基本計画	柱	暮らしを彩る
	大項目	生活に根つき誇れる文化・スポーツの振興
	取組みの方針	芸術・文化の振興
	主要施策	芸術・文化の担い手の育成

関連計画	
事業期間	合唱団: 昭和49年度～、オーケストラ: 昭和56年度～
経費区分	義務的経費

-2-(2)-

事業名	北九州市芸術文化振興財団委託事業
-----	------------------

事業の概要	何(誰)をどのような状態にしたいのか。	北九州市少年少女合唱団、北九州市ジュニアオーケストラの活動を通じて、合唱技術や演奏能力の向上並びに団員相互の親睦を深め、情緒豊かな青少年を育てるとともに、市民文化の高揚を図ります。			
	その結果、実現を目指す施策名と成果	施策名	芸術・文化の担い手の育成	成果	

目的実現の為に実施する内容	実施工程	年度					計画変更理由
		平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	
実施状況	当初計画		北九州市少年少女合唱団の団員 90人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人	
	現状	北九州市少年少女合唱団の団員 90人 北九州市ジュニアオーケストラの団員 110人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人 北九州市ジュニアオーケストラの団員 110人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人 北九州市ジュニアオーケストラの団員 110人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人 北九州市ジュニアオーケストラの団員 110人	北九州市少年少女合唱団の団員 90人 北九州市ジュニアオーケストラの団員 110人	
実施状況	成果・活動指標 (上段: 指標名、下段: 指標設定の考え方)					平成21年度	目標
	北九州市少年少女合唱団の団員数				計画	-	年度 平成25年度
	北九州市少年少女合唱団に在籍している人数を指標とします。				実績	90 人	内容 90人
					達成度	%	
実施状況	北九州市ジュニアオーケストラの団員数				計画	-	年度 平成25年度
	北九州市ジュニアオーケストラに在籍している人数を指標とします。				実績	110 人	内容 110人
					達成度	%	
コスト	A時点 - B時点 - C時点 22.7月 [21年度: 執行額]				事業費	95,097 千円	事業にかかった人件費の目安(21年度) 1,320 千円
					うち一般財源	80,752 千円	
単年度計画							

[事業の実施結果・進捗状況の確認]

実施結果	21年度に実施した結果、当初計画(実施工程)に対する進捗状況はどうか。	定期演奏会に加えて、市内イベントに出演し、音楽を楽しむ機会を提供することができました。その過程において、異年齢の団員との活動の中で、合唱や演奏を通して自主性や協調性等を学ぶとともに、情操豊かな人間形成と音楽文化の高揚を図ることができました。
------	-------------------------------------	--

[事業の再検証]

評価	有効性 この事業は施策の実現に対し、効果があったのか。	3	練習活動を通じて、情緒豊かな青少年を育てることを目的とした本事業は、施策目標「芸術・文化の担い手の育成」に対する有効性は高いものと考えられます。	
	経済性・効率性 同じ効果をより低いコストで得られないか、または、同じコストでより高い効果を得られないか。	4: 高い 3: やや高い	3	市の外郭団体が行っており、市が直接運営するより、コスト面で経済的な運営ができています。ただし、短期的な成果が見えづらいため、目的と効果を検証しながら、事業を実施する必要があります。
	適時性 今実施しなかった場合、施策実現に対する影響はどうか。	2: やや低い 1: 低い	3	北九州市少年少女合唱団、北九州市ジュニアオーケストラはともに、音楽活動を自ら行う人の育成を図っており、施策への高い成果が期待できます。人材育成は継続的に事業を実施することが、大切であると考えています。
	市の関与の必要性 実施主体として市が適切なのか、市の関与をなくすことはできないのか。	3	3	本市において、本事業のように大規模かつ計画的、総合的に実施している民間団体は存在せず、市が関与することは適切であると考えられます。
今後の方向性	評価結果を検証した上で、今後の事業の方向性(いつから何をどうするのか)を決定する。	ア: 事業の見直しを図ることが可能 イ: 休止・廃止を検討 ウ: 現状のまま進めることが適当 エ: 終了	ア	北九州市芸術文化振興財団委託事業は、情緒豊かな青少年を育てるとともに、市民文化の高揚を図るための事業であり、「芸術・文化の担い手の育成」を図っていく上で重要な事業であると考えています。今後も目的と効果を見極めながら、目標の達成に向けて着実な取り組みを進めていくことが適当だと考えます。

事業評価票

平成21年度実施事業	新規	継続

A時点: -	B時点: -	C時点: 22.7月

担当局/課	企画文化局	文化振興課
連絡先	582-2391	

基本計画	柱	暮らしを彩る
	大項目	生活に根付き誇れる文化・スポーツの振興
	取組みの方針	芸術・文化の振興
	主要施策	芸術・文化の担い手の育成

関連計画	
事業期間	フェスタ:平成15年度～、コンサート:平成18年度～
経費区分	裁量的経費

-2-(2)-

事業名	芸術文化体験事業	
-----	----------	--

【事業の概要】	何(誰)をどのような状態にしたいのか。	文化体験を通して、子どもたちの豊かな情操を養うとともに、芸術文化に対する関心を高め、未来の文化の担い手として育成します。子ども文化ふれあいフェスタは、地元文化団体等が企画したワークショップ等を年1回行っています。学校訪問コンサートは、アーティストが直接学校に向いて生の音楽等を提供しています。	
	その結果、実現を目指す施策名と成果	施策名	芸術・文化の担い手の育成

【目的実現の為に実施する内容】	実施工程	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	計画変更理由	
		当初計画		子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 680人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 680人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 700人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人		子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 700人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人
	現状	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 666人 学校等訪問コンサート参加者人数 2,722人	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 680人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 680人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 700人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人	子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数 700人 学校等訪問コンサート参加者人数 1,800人		
	実施状況	成果・活動指標 (上段:指標名、下段:指標設定の考え方)					平成21年度	目標
		子ども文化ふれあいフェスタ参加者人数			計画	-	年度	平成25年度
		子ども文化ふれあいフェスタは、子どもたちを対象に様々な文化体験・鑑賞ができる「子ども文化ふれあいフェスタ」を開催し、文化を身近に感じてもらうことにより、子どもたちの豊かな人間性と多様な個性をはぐくむものです。			実績	666 人	内容	700人
		学校等訪問コンサート参加者人数			達成度	%		
		学校等訪問コンサートとは、北九州市市民文化賞・奨励賞を受賞した芸術家(主に音楽)を小学校等に派遣し、子どもたちに生演奏を聞いてもらうコンサートです。[H22から小学校に特化]			計画	-	年度	平成25年度
					実績	2,722 人	内容	1,800人
					達成度	%		
	コスト	A時点 - B時点 - C時点 22.7月 [21年度:執行額]				事業費	7,794 千円	事業にかかった人件費の目安(21年度)
						うち一般財源	7,794 千円	3,660 千円
	単年度計画							

【事業の実施結果・進捗状況の確認】	
実施結果	<p>21年度に実施した結果、当初計画(実施工程)に対する進捗状況はどうか。</p> <p>子ども文化ふれあいフェスタでは、子どもたちが普段接することがあまりないと思われる伝統芸能の分野(日本舞踊、いけばな、琴等)を中心としたものである。実際に体験してもらうことで、その楽しさを実感してもらえたと思う。またアンケートでは、約90%が楽しかったという回答を得ることができました。</p> <p>学校等訪問コンサートでは、子どもたちが集中して音楽に聞き入っており、また学校の先生からも普段接することができない生演奏をきくことができ、貴重な経験ができたとの声が多く寄せられた。アンケート結果においても、満足との回答が90%を超えました。ただし、目的等を勘案し、効果的な事業を推進するために、幼児を対象にした大人数のコンサートを廃止し、22年度から小学校に特化することにしました。</p>

【事業の再検証】				
評価	有効性 この事業は施策の実現に対し、効果があったのか。	3	ふれあいフェスタについては、本事業をきっかけに、興味をもち、継続して文化活動に取り組んでいる子どもたちがおり、将来の担い手の育成に貢献しています。学校等訪問コンサートについては、身近な場所で生音楽に触れることができ、将来を担う幅広い人材育成に貢献することができました。	
	経済性・効率性 同じ効果をより低いコストで得られないか、または、同じコストでより高い効果を得られないか。	4: 高い 3: やや高い 2: やや低い 1: 低い	3	ふれあいフェスタについては、当日の運営業務等は外部委託を行い、低コストで実施しています。しかし、高い効果が得られるようにさらに、工夫する余地はあります。学校等訪問コンサートについては、省力化、効率化を図っていますが、短期的成果は見えずらく、今後外部へのアウトソーシングを含め、検討を続ける必要があります。
	適時性 今実施しなかった場合、施策実現に対する影響はどうか。	3	3	施策実現のため、今後も事業を継続的に実施していく必要があると考えます。ただし企画内容等を工夫する余地はあると考えます。
	市の関与の必要性 実施主体として市が適切なものか、市の関与をなくすることはできないのか。	3	3	ふれあいフェスタについては、事業の趣旨等を勘案すると、実施主体は市が適切と考えています。学校等訪問コンサートについては、計画的、総合的に実施している民間団体は存在せず、現状では実施主体は市が適切であると思います。
今後の方向性	<p>評価結果を検証した上で、今後の事業の方向性(いつから何をどうするのか)を決定する。</p> <p>A: 事業の見直しを図ることが可能 I: 休止・廃止を検討 U: 現状のまま進めることが適当 E: 終了</p>	A	芸術文化体験事業は、主に子どもたちを対象に文化に身近に接してもらおうという事業であり、「芸術・文化の担い手の育成」を図っていく上で重要な事業であると考えています。事業の実施に向けて、外部へのアウトソーシングの検討を行いつつ、目標の達成に向けて着実な取り組みを進めていくことが適当だと考えます。	

事業評価票

平成21年度実施事業	新規	継続

A時点: -	B時点: -	C時点: 22.7月

担当局/課	企画文化局	文化振興課
連絡先	663-1615	

基本計画	柱	暮らしを彩る
	大項目	生活に根つき、誇れる文化・スポーツの振興
	取組みの方針	芸術・文化の振興
	主要施策	芸術・文化の担い手の育成

関連計画	
事業期間	平成9年度～
経費区分	裁量的経費

-2-(2)-

事業名 現代美術センター・CCA北九州事業

事業の概要	何(誰)をどのような状態にしたいのか。	CCA北九州では、世界の第一線で活躍するアーティスト等を講師に、若手アーティストのための学習プログラム(リサーチプログラム)を運営しています。21年度までに172名(うち海外26カ国・78名)が参加、多くがプログラム修了後も国内外で旺盛な活動を展開しています。また、地域の子どもの対象に感性や創造性を開発するプログラムも毎年実施しています。CCAの持つ専門性やグローバルで独創的なネットワークを活かし、本格的なアーティストの育成及び、子どもに特化した事業を通じ、本市の芸術・文化の担い手の育成に寄与していきます。		
	その結果、実現を目指す施策名と成果	施策名	芸術・文化の担い手の育成	成果

目的実現の為に実施する内容	実施工程	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	計画変更理由		
		当初計画	-	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回		・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回
現状		・リサーチプログラム 受講者数 5人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回	・リサーチプログラム 受講者数 5人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回	・リサーチプログラム 受講者数 7人 ・子ども対象プログラム ワークショップ 1回 アート関連演劇 1回			
実施状況	成果・活動指標 (上段:指標名、下段:指標設定の考え方)						平成21年度	目標	
	リサーチプログラム受講者数					計画	-	年度	平成25年度
	国内外の20代から30代の若手アーティストが7ヶ月間にわたり本市に滞在しながら自身の制作活動を進めるプログラムであり、世界のアートシーンで活躍しようとする人材育成を目指しています。これまでの参加者の中には、国内外の著名な美術館やヴェニス・ビエンナーレなどの国際展に出展するようなアーティストも輩出しています。					実績	5人	内容	7人
	子ども対象プログラム					計画	-	年度	平成25年度
柔軟な考え方やものの見方、あるいは、鋭い感性や創造性を子どもたちが備えていくことは、本市の未来にとっても非常に大切な人的投資であると考えます。CCAの専門性とネットワークを活かし、子ども向けの質の高いプログラム実施を心がけていきます。					実績	1回	内容	2回	
コスト	A時点 - B時点 - C時点 22.7月[21年度:執行額]					事業費	59,190千円	事業にかかった人件費の目安(21年度)	
						うち一般財源	54,190千円	6,000千円	
単年度計画									

【事業の実施結果・進捗状況の確認】

実施結果	21年度に実施した結果、当初計画(実施工程)に対する進捗状況はどうか。	リサーチプログラムへは選考の結果、外から5名の参加を得ました。国内のの類似プログラムと大きく、航費、在費、制作費などの支援がなく、かつ、受講料を徴収する形態を採っているため、参加に至る障壁が非常に高く、経済的な理由のみで参加を取りやめる場合も少なくありません。2008年秋以降続く世界的な不況や円高基調が続く限り、プログラム内容に関わりなく、このような潮流は不可避であると考えます。一方、子ども向けのプログラムについては、プロの音響・映像作家を講師にサウンドとムービーのワークショップを実施し、当初の枠を大幅に上回る約40名の子どもたちの参加を得ることができました。(上記事業費はCCA北九州事業の全体予算であり、このうち人材育成関連に充てられている経費は約14,000千円)
------	-------------------------------------	--

【事業の再検証】

評価	有効性 この事業は施策の実現に対し、効果があったのか。	4	現代美術という分野に限定はされませんが、高い負担にもかかわらず、国内外の非常に優秀な若手アーティストが自発的に本市に7ヶ月間滞在しながら制作を進めるという現状は、特筆すべきものです。子ども向けプログラムに関しても、固定観念や先入観なくフラットな視線でものと向き合える子どもたちこそ、現代美術や先端メディアを通じた育成に最適の層であると考えます。
	経済性・効率性 同じ効果より低いコストで得られないか、または、同じコストでより高い効果を得られないか。	4	高い
	適時性 今実施しなかった場合、施策実現に対する影響はどうか。	4	2: やや低い
	市の関与の必要性 実施主体として市が適切なものか、市の関与をなくすることはできないのか。	4	1: 低い
今後の方向性	評価結果を検証した上で、今後の事業の方向性(いつから何をどうするのか)を決定する。	ウ	本事業は施策に対する有効性も高く、「芸術・文化の担い手の育成」を図っていく上で重要な事業であると考えています。特にリサーチプログラムは既に国内外において一定の知名度と評価も確立しているため、例年、国内外の多くの若手アーティストより問い合わせを受けています。本市での滞在経験を通じ、アーティストが世界の第一線で活躍していくことは、本市の文化都市としてのイメージアップや市民の誇りの醸成など、人材育成に留まらない様々な効果も期待できます。子どもを対象としたプログラムを含め、本市の独創的な人材育成事業として、引き続き、着実な事業実施を推進します。

事業評価票

平成21年度実施事業	新規	継続

A時点: -	B時点: -	C時点: 22.7月

担当局/課	企画文化局	文化振興課
連絡先	582-2391	

基本計画	柱	暮らしを彩る
	大項目	生活に根つき誇れる文化・スポーツの振興
	取組みの方針	芸術・文化の振興
	主要施策	芸術・文化の担い手の育成

関連計画	
事業期間	平成21年度～
経費区分	重点経費

-2-(2)-

事業名	北九州市子どもノンフィクション文学賞
-----	--------------------

事業的概要	何(誰)をどのような状態にしたいのか。	文学には、想像力をかきたて、表現力を養い、コミュニケーション能力を高めるなどの力があります。中でも、ノンフィクションは、自分自身が見たり、聞いたり、体験したことに問題意識をもち、事実を通して真実に迫るものです。パソコンやゲームなどの「仮想空間」に囲まれ、現実を見つめる経験が乏しいといわれる現代の子どもたちが、人間や社会へ関心をもち、思考力を高めながら成長していくきっかけとなるよう、平成21年度に新たに小中学生を対象にした文学賞を創設しました。		
	その結果、実現を目指す施策名と成果	施策名	芸術・文化の担い手の育成	成果

目的実現の為に実施する内容	実施工程	当初計画	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	計画変更理由		
		現状	応募件数 1524	応募件数 1600	応募件数 1800	応募件数 1800	応募件数 2000		応募件数 2000	
	実施状況	成果・活動指標 (上段:指標名、下段:指標設定の考え方)						平成21年度	目標	
		応募者数					計画	-	年度	平成25年度
		平成21年度に創設した文学賞であるため、応募件数の予想や結果分析はまだ困難ですが、今後も引き続き、全国の小中学生に向けて積極的に広報活動を実施します。					実績	1,524 件	内容	2,000件
				達成度	%					
コスト	A時点 - B時点 - C時点 22.7月[21年度:執行額]					事業費	13,082 千円	事業にかかった人件費の目安(21年度)		
						うち一般財源	13,082 千円	6,000 千円		
単年度計画										

【事業の実施結果・進捗状況の確認】

実施結果	21年度に実施した結果、当初計画(実施工程)に対する進捗状況はどうか。	平成21年度に創設した文学賞ですが、第1回目の応募総数は1,524編と予想を上回る応募結果でした。しかしながら、その内、北九州市内からの応募が1,359編で、89%を占めており、今後全国や海外にむけて積極的にPRしていく必要があります。また、中学生の応募数1,453編に対し、小学生が71編であり、「ノンフィクション」という分野がやや小学生には難しいイメージがあることが予想されます。そのため、小中学校にもご協力いただきながら、学校を通じたPRも積極的に行いたいと思っています。
------	-------------------------------------	---

【事業の再検証】

評価	有効性 この事業は施策の実現に対し、効果があったのか。	4:高い 3:やや高い 2:やや低い 1:低い	4	第1回目は、応募件数も予想を上回り、なかなかの力作ぞろいで、今後どのような作品がこの文学賞から生まれてくるか楽しみな結果となりました。北九州市から全国の子どもたちへこのような文学賞を発信していくことは、文化の担い手の育成に大きく貢献していると考えます。
	経済性/効率性 同じ効果をより低いコストで得られないか、または、同じコストでより高い効果を得られないか。		3	21年度に創設したばかりなので、今後応募内容の分析を行い、課題や問題点について検討していきます。
	適時性 今実施しなかった場合、施策実現に対する影響はどうか。		4	本市では平成2年度より、「北九州市自分史文学賞」を継続して実施しており、当文学賞はジャンルとしては同じノンフィクション作品を募集する子供向けの文学賞です。このような文学賞は他都市ではあまり例のない本市独自の取り組みであり、文化の担い手の育成に十分貢献していると言えます。
	市の関与の必要性 実施主体として市が適切なのか、市の関与をなくすことはできないのか。		4	現在のところ、他の実施主体は考えられず、実施主体は市が適当だと考えます。
今後の方向性	評価結果を検証した上で、今後の事業の方向性(いつから何をどうするのか)を決定する。		ア	平成21年度に創設した文学賞であり、他都市ではあまり例のない本市独自の取り組みであるため、応募件数の増加につながるよう全国・海外に向けて積極的にPRし、事業展開していきたいと考えます。今後は応募内容の分析を行い、課題や問題点について検討していきます。